して、そして乾いでから、うんムガシあのワラでこう長ぐぁこう結んで、そして10枚か15枚ずつ束ねで。その厚さによっても違いますけどね。それをムガシあのしょいこってあのたなぐ、みなタメイゲってそのみんな下になっているどごでみんな、それを道路がらタメイゲのがらヌマがら、その山づたいにしょってくるわげだでばな。いや、だんで大変だったよみな。」「いや（乾燥させる作業も）もぢろん手伝うわね。うん。」「それみな小屋さ貯めでおいで、そうそうそう。雨さあだればもう焚げないもんだがら。」

用途　▼サラケはイロリで焚いた。しかし、炊飯に用いることはなかった。炊飯の場合は、松や杉の枯れ葉を拾ってきて炉にくべ、ツルベにナベを吊しておこなった。それは姑の役割だった。電気釜よりもかえってナベで炊いた当時のご飯のほうがおいしかったという。サラケは加熱ではなく保温に用いられた。――「全然違う。全然。（いろりの時代ですね）だがらイロリで焚ぐわげみんなね。」「イロリでもぢろん。こう、そう、あのツルベってね。であの、松の葉っぱとが、杉の葉っぱ、枯れたの拾ってきて、秋に集めで、それ焚ぐわげ。それがやるのいつもお婆さんの役目で、イロリの下に座って火焚いで、熱ぐして。」「（炊事にサラケは）使わない。ご飯炊ぐどぎはその杉の葉どがマツの葉ばり。パッパどやさねぁなんねどごで。サラケてすのはもうあどはあ、あだためるだ、のアレだどごで、ご飯とかそういうぶねあ炊げないもんね。でもあだのあだりご飯おいしがったよナベで炊いででも。うん。いまのあえず、かえって電気カマより美味しかったみたいだよ。そういう感じします。」

▼往時はタキギが不足していたので、タキギにサラケを足して焚いたとＴ氏は考えている。つまり、サラケはタキギの不足を補うための燃料であるとの認識である。タキギは春と冬に集落の者が集まり、村山から伐って分配した。――「うん。ムガシは何故ってばタキギが、焚ぐものながったがら。結局そういうのを足して焚いだんだべさ。であの、ムガシあの、ブラグでもタキギの配給あって、冬ど春に全部ブラグであづまって、みな山の木伐って、そして分配したわげ。でも足りないどごで、そういうのを、まず足して、やったわげ。」

操作　▼調理においては、サラケは加熱ではなくもっぱら保温に用いられたという。加熱する際は、「パッパと」燃える杉や松の葉が利用された。燃料と火の使い分けがなされていた。

副産物　▼イロリでサラケを炊くと煙がひどかった。夜寝ていると、煙が部屋の中をスーと漂っていくのが見えた。そのために「メクサレ」が多かったとＴ氏は考えている。燻製のような独特のニオイもした。サラケを焚いた際に出る灰を活用することはなかった。――「そのイロリがあってぁたってあの、燻るだよね。煙が。うん。だがらすんごぐ眼がわるぐなってね。ニオイもすごい。今の燻製みたいなニオイがね。流れでね。あのどぎすごがったものみなムガシいだどぎ、いくてワラブトン、それがら海のゴモって海がら上がった、拾って布団がわりにして。大変であった風呂も入るごとでぎながったし。まず、全然今ど生活ね、違いましたね。」「でも、すごぐナガ燻ってしまって、私も終戦後３年生のどぎ来たけど、その時焚いでだどごでびっくりして、ばげに寝るどご煙がすーっと漂って（笑）、ほでムガシ メクサレメクサレってムガシさ、眼悪がったよねムガシの人はね。うん。」「やっぱりサラケ焚ぐしか（用途は）ないね。うん。（灰は）使わない。灰ってすのは…あれ蕨どがそういうのにやったでないが使った…みたいだけど、使わないね。」

その他　▼サラケを切る場所が子どもたちの遊び場だった。――「みなムガシは子どもみな遊ぶどごってね結局そういうしか遊ぶってながったもの。今だけにテレビあるわげでないし。うんアレもあるわげでないし。うん。」

▼食事は各自の膳と食器を使っておこない、洗う頻度は少なかった。――「いやちゃんとそれはご飯はイロリでなぐ、そのイロリの前にこう、ムガシあの、みな板の間であったどごでいながだどごでそごで正座、あの座って、で自分の食べるお膳てあるわげ。そごにぁ茶碗どあのオツユのむ茶碗ある、ど皿ど置いで、で自分で各自食べだら、収めるどごあったどごで、それ収めるわげ。でも水もあんまりながったもんだがら、自分の茶碗どがそういうの一週間も洗わながったの（笑）。そういう時代であった。」

▼夜具にワラ布団を使えるのはまだよいほうで、海から拾った海藻を布団にした。風呂に入ることもまれだった。当時は今と生活がまったく異なり、大変であったとＴ氏は語る。――「あのどぎすごがったものみなムガシいだどぎ、いくてワラブトン、それがら海のゴモって海がらあがった、拾って布団がわりにして。大変であった風呂も入るごとでぎながったし。まず、全然今ど生活ね、違いましたね。」（2017年8月27日取材）

(4)つがる市木造出来島

㉑ U氏 大正13年生(94歳）男性

来歴　▼当地で生まれ育った。父親は16人きょうだいの9番目、母親は10人きょうだいだった。出来島の海岸の外れの、小さな家に住んでいた。分家だったので生活は貧しく、海岸に行って海藻や魚を拾って暮らした。

呼称　▼サルケ、サラケと称した。Ｕ氏は名称についてあらたまって尋ねると、「サラケ」であると答えたが、自然な会話のなかでは「サラケ」と発音することが多かった。

使用年代　▼U氏が50歳近くまで、昭和40年代終わりころまで使用していた。――「サルケはだいたい、50(歳)ぐらいメーまで、ああ、使った。うん（サルケを使わなくなってからストーブになった）。うん（サルケでストーブを焚いたことは）ない。他所だばあるウヂもあたがもしらねばてオライでだばね。」「45(歳)も、まっとも、まず50(歳)ちけえでぁ。」

入手法　▼サラケを掘る場所には権利があった。考え方次第で、自家消費用に長年採掘権を保持する人もあれば、権利を売買する人もいた。U氏の家では、生活が苦しくても、その権利を持つことが将来の生活の保障になると考え、売る人があればそれを買っていた。そのため、U家では丸山から出来島へ向かう途中にある沼など複数箇所に権利を持っていた。――「それでも（サラケを掘る）場所あの権利あてや。だんでそのあのもてあ人のかがえよう（考えよう）でや、大切に自分でやてる人もあるし、商売にして、グッド何年がであのうてまたり。」「うん（ヌマの中に権利地がある)。」「ウヂだばあの、こご行げば、丸山がらますぐに来たべ。あのこちがわにあのヌマある、あすこにもあたし、何カ所にもそれでも（権利を持っていた)。」「だんでその場所、権利売りがいしたもんだね。んだどごで、あの、それもてれば、あのアレすはんでて、苦しくても売る人あればああ、買って持ってあったわげさ。」

出来島の集落

▼他人の権利地からサラケを盗む人もいた。サラケは数段の深さに掘るが、分からないようにその上１段分だけを掘り採るのである。露見したときには弁償したうえで、再犯しないことを口約束で誓った。一筆書かせるということまではしなかった。――「それこんだ、あの、全然アレだ人だあ、この気（け）（盗み癖）あるばこんだ、ほがの人、よその人知らねこ前に上１段ずつこんだああの、盗む人あて。（ばれた人も）あるよ。（ばれれば）こんだナガさはるフトはって、あの、いぐらかカネよごしてあの、謝って（笑)。今度そいうごどしないって（口約束で）なあ。それ（一筆書くようなこと）まで（は）いがねえ（けれども)。」

▼出来島ではサラケの採取と販売を生業にしていた人が何人もいた。サラケ切りの人手を頼み、大量に採取して大々的に売った人がいた。サラケを求める人は直接出来島へ来て交渉し、後に馬で一度に1000枚(140マロほど。つまり１マロあたり７枚である）を積んで配達した。サラケ1000枚は一冬を越すために適当な量であり、価格は米1.5俵ほどに相当した。運賃を加えると２俵ほどの値段になった。得意先は木造町の近郊で、サラケの採れない地域の人や、「田がいたわしくて」（田がもったいなくて）田の下にサラケはあるけれども掘りたくない人などが買いに来た。他にもさまざまな場所から来ていたが、遠くは鶴田からも買いに来た。――「(掘る季節は）７月の末だな。それ８月かげで、それ商売にしてあの切る人も頼まれであったし、頼んでああいっぱいやって売った人も、（出来島では）それで生活した人もあるんだ。」「買うに（出来島まで）来るんだ。うん。そしればさ、決めで、あの、オラたち馬であの商売したはんで、馬であの千ぐらい一回に束いで届げにいぐわげさ。」「(１束は）７枚ぐらい。馬、車さ。馬車。1000枚ぐらい一回に積んでいぐの。」「(買いに来るのは）この山手でなぐあの、木造とがあの付近が、そごサラケねどごあるどごで、あどあてでも切れば穴なってまるどごで田んぼいだわしどごで、あの、買うにくるわげさ。」「ほぼがら来てだよ。ツルダあの付近がらも来たもの。木造（の）ザイ。あどは、決まってね。それでも結構商売にしてら人、それで生活した人あるんだ。何人もある。」「(サラケの価格は）おー、どあ、1000（枚）あれば……米１俵半もとるわげさ。うんだで買う人だあ２俵ばりになてまるわげ。運賃も払ねばまねし。」「(1000枚あれば）一冬だばいい。」

採取の目的　▼自家消費と販売を目的とした。ただし、U氏自身は、販売目的で採取したことはない。――「ウチでだば売ったごとねな。ウチであの、他所がら分家あの本家がらあの分家したウチだどごで、あいまオラで二代目だはんで。」

採取の時期・場所・主体　▼自家用・販売用のいずれも、７月末から８月にかけて出来島近辺の沼から採取した。――「７月の末だな。それ８月かげで、それ商売にしてあの切る人も頼まれであったし、頼んでああいっぱいやって売った人も、(出来島では）それで生活した人もあるんだ。」「(出来島に）来る途中、ヌマあるべ。どごのヌマでもあるよ。」

採取法　▼まず、沼の中にナワを張り、ナワに沿って垂直にテッコダ（テンビンダ）を突き刺した。サラケの層が出るまで表土は捨てた。サラケは２人一組で沼の水に浸かりながら切った。一人目が一尺×一尺強×厚さ15㎝程度に切り取ったものを、後の人が３枚に切り分けてから陸に放り上げた（図７)。陸に上げられたサラケは、女性たちが並

べた。家族の場合もあれば、他家に頼んで手伝ってもらう場合もあった。サラケを採るために、沼を７段ほど掘り下げた。一枚は一尺×一尺強で厚さは15㎝だから、７段掘れば２メートルを超える深さになる。――「テンビンダってあってさ。最初はあのサルケでねどご、し（捨）てで、サルケ出でこだあづいどごだば７枚ぐらい採るんだ。だいたい、（と示し、一尺×一尺強の長方形、といっても）たいした変わらない。長さと幅と（が）。厚みは……このくらい（15㎝くらい）だな。」「サラケやるのは、テッコダってあって、それでグッグどこうまっしぐに（下へ突き刺し、ヌマの中で）縄張ったどごやって、うん。（ヌマには）水あっても最初上のほであのやればしたまでましぐに行ぐにして、なしぐに（まっすぐに）。」「そういうの（タヂなどの他の道具）は使わねえ。ああああ。」「切るふどど、こんだ大きぐき、ああああ倒へばこう３つだら３つに切る人後ろさついで歩いて、それどだば水さ入ってるわげ。」「あの、細かく切る人、上げるわげ。あの上にあの女の人だのら、それあの並べるにあのそ、人いるわげ。上がて来ればしぐ。う。（その女の人だのというのは）家族もあるし、頼まえで行ぐ人もあるし。」「子どもだばそうオラでも子どものとぎだばてづだねもの、他所の人だば、アレだべにな。」「うん、そうそう。……、ま苦労したでばな。今で言えば想像でぎねえべ。恐らぐ。」

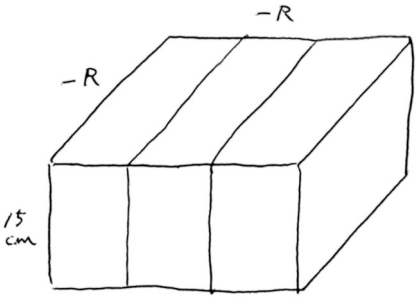

図７

乾燥・運搬・保管　▼上に放り投げられたサラケは女性が並べて乾燥させた。まず平置きにしてある程度乾燥させ、乾燥した表側を今度は内側にするかたちで、八の字形に立てかけて更に乾燥させた。その後、間隔をあけて互い違いに７段ほどのレンガ積みにして、乾燥を促した。――「それこんだ切った人はどんどどんどど投げでよごすどごで、それごど、こんだあの、はご（運）んで乾がすどご乾がして。そしてある程度乾げば、今度あの乾いだほうナガさ入れであの（斜めに）立ででこうやって。それ乾げば今度、あの、更にこんだこう間おいでそれさちょうどこう間さこうやって７段ぐらい、積んであのそして乾がすわげさ。」

用途　▼サラケの火は暖かかったが、煙が出ない点はマキのほうがよいとＵ氏は語る。現在、Ｕ氏は部屋でマキストーブを使用している。石油ストーブよりも暖かみがあってよいのだという。Ｕ氏は翌年の分までマキを用意している。――「（サラケは）あーあ、あつど。それだば熱い。」「（サラケと違って）マギぁだば煙出ねえんで。（マキのほうが便利）うん。」「（マキストーブは）石油ど違って、あだたがみあるわげ。全然違うんだ。だんで、このこの部屋だげだばや、あれ、冬だばや、あれ、ずーっとマギで来てるんだ。セギユストフは使わね。オナゴど（女性たちが）料理すたりすどごだば（する場所には）あるばてな。」「オラだいたいこどしの冬ど来年の冬、焚く分（のマキ）はあしこさあ、（準備している）。」

▼サラケは冬季の採暖のほか、炊事、風呂焚きなどに通年で利用した。炉にナベをかけて、サルケを燃料として飯を炊いたり、魚を串に刺してサラケの火で炙った。ネコがその焼き魚をツメで引っかけて倒し、咥えて逃げて行き、嫁や姑がそれを追いかけるという出来事もあったという。――「ナヅは焚がねばって、まずほとんとだでばの。ご飯だの焚ぐづぎだばサルケ使って。そのほがなもねもな。（ご飯を炊くのもサルケで）うんそうそう。そへばやってナベかげでそしてやってがわりさサガナ、焼ぎザガナやるに、くさとひて（串に通して）こやておげばネゴこんだあ、手こ延べでこってやって、へば、ツメふかがればこちゃ倒れで、ネゴぁそれ咥えで逃げでまて（笑）。女の人どそれ追いかけで行って。そんであった。」

▼Ｕ氏が子どものころ、自宅に風呂はなかったが、隣家に五右衛門風呂があった。風呂に入らせて貰うかわりに、オケで水を運び、燃料としてサラケを持って行って湯を沸かし、隣家の人々が入浴を済ませたあとに、入らせて貰ったという。夏場であれば、海水浴が風呂がわりだった。――「（風呂焚きにも）サルケを使った。うん。五右衛門風呂だでばな。（サルケはお風呂を沸かすくらい燃えるのか）うん。うん。オラ子どもだづぎだば、風呂ねどごで、あ、となりのウヂで風呂たでるてばオゲ持ってって水はごんでそれさ焚ぐサルケ持ってったりして。そごのウヂで入ってまってそのあどさワダチこんだ行ってはらへでもらって。そであった。夏だばろ、海岸さ行ってこんだ、ハハハハ。夏だばほとんとすぶた。」

操作　▼出来島の海岸から拾ってきた流木の上にサラケをのせて火をつけた。Ｕ氏が30歳のころまで、つまり昭和20年代終わりころまでは、海に寄った木を拾って利用していたという。――「それ（サラケ）ばりおっけ、それど海岸さ寄ったあの木拾って来て。」「（海から木を拾ったことは頻繁に）あるよ。あの、オラダヂあの30歳ぐれまでだらみな拾って来て。燃やして、サラケそのアレさそうやって。あのそれナンボにもこうやって、そして（サルケを燃やした）。」

副産物　▼煙がひどく、目から涙が出た。特に、火がつくまでの間がひどかった。ニオイもいまの人からみれば苦痛に思われるようなものであった。「サラケ臭い」と言われたこともあった。しかし、当時はどこの家でもサラケを焚いており、普通の生活だった。――「煙たくてなあー。ストフでねしよ。だてみなそれ焚いでるんだどごでどごのウ

チさ行ってもな。」「（煙がひどく）大変だ。目から涙出で。うん、だんだんあのアレだばってよ、最初あの火つぐまでろ、な。ニオイは今の人だぁはあ、ニオイも苦になるでば。みなそのはづ（ほづ）で生活したもんだどごで。」「うんうん。そうだ。うん（サラケ臭いって言われたことが）あるよ。」

▼昔はサラケをどの家でも焚いていたので、灰が豊富に出た。灰は、ワラビのあく抜きに使った。今もU氏の家ではマキストーブを使用しているので、２日ごとに灰を篩いにかけ、貯めている。今は石油ストーブの時代なのでかえって貴重である。近所の人には、自由に持ち帰ってもらっているが、他人がそれなりの手間をかけて貯めたものだからと感謝してもらって行く人もいれば、ただの灰だと思って当たり前のように持って行く人もいる。――「それ（燃料以外の用途）はないな。」（と言いつつ）「アレはさ、あの灰はや、あの、木もそだけども、ワラビとてくれば、ワラビあのとてきてアレし、ゆがいでやれば、あの水入れであ、灰、それ入るるに、そのとじだばなも売りがいねばて、今あの、欲してば売りがいしてる人もあるよ。や、オラだばあの、あの、灰ねなたきゃオラこごがらやてあの、ふづがばり暮らせば、こやて通して、たぐわえでおぐどごで、はあ、持てげ持てげてやれば、まだその人だぢもや、あの、人のあ手間いれだものアレだって、タダだあアレだってアレす人もあるしあだりめだどもって、人もあるしよ。その人の気持ちで。（今でももらいに来る人がいるのか）そうそう（昔はわざわざもらいに来る人はなかったのは各家庭にサルケの灰があったからである）。ムガシはほとんとそれ焚がねウヂねもの。」

その他　▼父親は16人きょうだいの９番目、母親は10人きょうだいだった。出来島の海岸の外れの、小さな家に住んでいた。生活は貧しく、海岸に行って海藻や魚を拾って暮らした。小学校５年生のとき（昭和10年）、鰺ヶ沢で運動会があった。選手であった友人は屋敷地が４町歩もある裕福な家庭で、小遣いを70銭貰っていた。U氏の家は貧しかったので、母親から10銭しか貰えなかった。選手を迎えに来る馬車に同乗すると、往復５銭かかる。U氏の手元には５銭しか残らなかった。U氏は選手ではなく、運動会では店ばかり見て過ごしたので、残り５銭の小遣いはすぐに消えてしまった。いっぽう、友人は馬車を待つ間にも、店先で10銭ほど買い食いをしていた。小遣いもあまりもらえず、みじめな生活だったとU氏は語る。

▼家に田があまりなかったので、それ以外の仕事で生計を立てた。なかでも砂利の販売は収入につながった。一年中おこなったが、たとえ冬の吹雪の日でも、午前３時30分頃に家を出た。他人が行く前に行けば、いい場所から良いジャリを得ることができたからだ。80歳になる父親を車に乗せて連れて行き、二人で砂利を積んでいると、遅れて６時過ぎころに他の人たちが来た。10時半頃まで仕事をすれば、１人あたり米３俵分の稼ぎになった。友人の嫁の娘二人に手伝いを頼むこともあった。人夫二人の手間賃を払っても、採算がとれた。現在の米の価格に換算すれば、１俵が１万２～３千円なら３万５～６千円分に相当する。帰宅後、馬に草を食べさせている間、父親は風呂に入っていた。砂利の採取は一年中おこなった。

南西方向の海岸　出来島集落はもともと海岸沿いにあったという

▼その父親は、生まれたとき未熟児だった。周囲の人たちはみな、そう長くは生きられないだろうと籍を入れずにいたところ、３歳になっても亡くなることはなかった。それではじめて籍を入れたのだという。だから、戸籍上の年齢は、実年齢よりも３歳少なかった。103歳９ヶ月３日で亡くなったが、青森県では当時２番目の最高齢者であった。実年齢では106歳だから、実際には県内最高齢であったかもしれないのだという。その父親は、80を過ぎても海岸にエビを捕りに出かけ、それを商売にしていた。酒や煙草は嗜まず、ジョギングが趣味だった。長距離を得意とし、80歳まで運動会に出ていた。だから、運動会の日には父親をはじめ家族でご馳走をこしらえて参加した。いっぽう、運動会があまり好きではないU氏は、その日は一人で注文を受けた人へ砂利を運搬した。午前午後と一日中運ぶと、運動会のご馳走代と子どもの小遣い代を差し引いても稼ぎが残った。砂利売り、古物商など、これまで11もの商売を営んだ。――「オラだば、今こごだばって、一番海岸のはずれっこのウヂそごに小さいあのウチあってや。そごさ分家したんだどごで。オラのチヂオヤ16人キョウダイだもの。母親10人キョウダイだしよ。（父親は）９番目。うん。それで、未熟児で生まれで、これだば９人もだどごでこれだきゃ助からねって、して籍入れないでムガシだどごで、セギ入れないで、３歳なっても死なねえし、次まだ生まえになったどごで、３歳のどぎ籍いれで、それがらナンボになるまで生きだどもる。うん、あの、３歳のとぎ籍のへでも、籍のてがら、103歳ど９ヶ月ど３日生ぎでる。うんだはんで生まれでがらやれば、106歳もなってるんだでばの。」「オラはそう生ぎれねね。今、満の93歳だべ。大正。13年。×月×日。だんで今日××（日付け）だんで。あど××日で（誕生日が来る）。」「小遣いもあまり、分家だどごで、あまりくれねえしや。海岸さ行って海藻拾って来たり、あの、

サガナ拾って来たりして。みじめな生活した、あの暮らした。オラ同級生で５年生のとぎあ、鰺ヶ沢さ運動会、選手でねえどごで、運動会見に行ぐづぎ選手ばむがえに行ぐ馬車、さ乗って往復乗るば、あの、５銭取らえるわげ。往復乗れば。それ、その当時70銭貰っていた友だぢあるわげよ。へば馬車来るまで店の前で待てるうぢに、10銭ぐれだばもの、あ、食て食べる。オラどのくらい持てぐてしたら母親がら10銭もらて、それ馬車さ往復乗（な）れば５銭取られで、あど５銭だばすぐつかてまるでばな。走えねもんだどごで店ばり見で運動会は（笑）。そういう生活した。エさ来る選手や、あの全部つかてまたて今つかまえればただがえるどごで、逃げるどごで選手だごどで（笑）そういう生活ばりした。へば今どんだってばその70銭、もらていた人亡ぐなたばて同級生で亡ぐなたばて、その当時でだあ４町歩もナンボもあたんだそれ今たったあ、家ふとつ、うぢふとつしかねんだ。」「オラ田んぼあまりねひてあたどごで、あの、ほとんと他所のしごどとが、海岸がらザリ（砂利）、あの山の上さ、上まではごんで、それあの売って。結構いいカネになったんだ。冬の場合はさ、三時半ごろに起ぎでいぐんだ。あの吹雪いでるとぎな。そして他所の人来る前から行げば、大体、米一俵半ぐらい当時の米一俵半ぐらい稼いでるわげさ。チヂオヤこんだ80ばりなるづどぎでもそのザリ上げに行ぐてへば、車さ乗ててや。二人で積んで使えるどごいいザリ上げるわげさ。そてあ、二人だどごでオラ マつえで（馬をつれて）上さあげでるうぢにつけやすぐしてチヂオヤそうしてそれがらよその人６時すぎでがら来るわげ。遠くさ行きてぐねえあカネの安いずばり上げねあね、いいやづ上げるてば遠ぐさ行がねあね。うん。だはんで、その当時で10時半ごろまで上げれば当時の米３俵づづぐれえ稼いだ。へば今で言えば１万２～３千円だばすべ。そればあ３万５～６千円。それでオラさげ全然のまねんだんで、エさ来てあの馬こんだあの草ちゃんとかへにやってるうぢにチヂオヤこんだ風呂さ入てろ。来れあ風呂さ入るにして……そんであった。」「うんうん（農業よりも砂利で稼いだ）。だんで、あの、女の人２人オラのトモダヂの嫁だでばな、あど、そごのムシメど二人ば頼んで使って、そしてオラナヅでもジャリ上げるわげ。へばアサマに早ぐ行ぐばって十時半ごろあなればウチさ帰ってくるわげ。２人人夫使ってそのほがオラの手間だばなったんだでな。」「（ジャリの採取は）ねんがら年中でもやるよ。」「（ジャリを売買したのは）その頃だば（歳が）まっといった（頃までやっていた）がもしらねえなあ。」「売りに行ぐんでねえ、ほとんと買いに来るんだ。五所川原のクシビギだの、あのサイカツだの来たんだよ。（用途は）あの今の土建業だよ。それさうぢたてるってへば、あ、あ、使うに。こつに来たり。」「それでそんき生きだっきゃ当時青森県でだばオドゴで２番目であった。だんで、まるっとだば、あの106歳もだば、１番だんだがもしらねえ。そういう性質であったべ。あまり急がねえ、サゲも飲まねえ、タバゴものまねえ、運動会でも80歳ぐらいだば運動会走ってあった。んだばって、短距離全然だめ。２時間ぐらい走るのでねばね。それろ、運動会だば楽しみで、飲むんでもねえアレだばて、そのよその人飲んでるうぢに走るに楽しみ行ってるわげや。へばオラ運動会しゅぎでねえかだどごで、あの、注文あればいちだえいぢ（いつならいつ）持って行ぐって運動会の日オラあの運動会見に行がねで注文あるどごさジャリ付けで行ってへばカゾグみんなでごっつぉうこさえでもてでアレしれもさ、あの、オラあ午前中いっぱい午後いっぱいはごべば、かぞぐアノごっつぉうやって子どもどがアレ使ってもや、あのオラの手間のごった。そういうごどばりした。」「80もなってがら、海岸さ行って、エビとって。商売にして。自分で。」「（自分は）商売11やった（笑）。古物もやって、商売11やって。」（2017年6月18日取材）

㉒ Ｖ氏 昭和8年生(85歳）女性

出来島の集落

来歴・使用年代　▼20歳のとき、つまり昭和28年に芦萢（鰺ヶ沢町）から出来島へ嫁いだ。出来島では、見たことのない燃料が使われており、初めてサラケというものを知った。採取を手伝った経験もある。しかし嫁ぎ先の家で使うことはなかった。「何も燃やすものがない人であれば、使っていたのではないか」とＶ氏は考えている。――「そえ、今だばなもねなあ。大ムガシだ。ずっとアヂのほうだもの。オラもてづだたごどあるばて、大ムガシにこのエでねぐソヂにいだどぎ、んだこちゃ嫁に来て来たづぎ、20で来たはで今84だはんで、今だば、へばソヂのコヂの、オメダぢいまどごかって来た？神社来たが。あぢのほの年いたふとにきげばわがでねが。」「（私は）嫁になて来たづやこちゃ。アシヤヂて（ぶ）らぐまさみのほぢがら来た。」「あちヤマオグだもの（木があるからサラケは使わなかった）。山んながだはんで、こちゃきて初めでわがたづ。（嫁いだ）うんそのあだりだばつかてあたな。オラだばてだごどねばて、なもねふとだばそれつかてあたでねが。ずとカミのほのふとだづな。」「ほがの人焚いだ話してあたはんでな。」「したんでこぢデギシマの村の年いたフトに聞がねばわがねのしかず。うんわがねぇまず今ふぇぐ（100）なるが、な、そぅちがぐの人でねあわがねでばの。」「ワァ昭和８年生まれだぁ…オメだぢどづのほがら来た」（2017年6月18日取材）

㉓ W氏 昭和17年生(76歳) 女性

来歴 ▼昭和17年に当地で生まれた。当地で結婚し、商店を経営している。

呼称 ▼サラケと称した。

使用年代 ▼いつごろまで使用したかは定かでない。

定義・分布・質 ▼出来島には「ヌマ」が多い。そのヌマからサルケが豊富に採取できたので、集落の人々はみな使用していたという。――「ヌマ。出来島でもヌマいっぱいあるんだね。」「(出来島ではみなサルケを) 使ってあった。みんな使ってあったんでねが。うん。ヌマがらとれるどごで。」

入手法 ▼W氏もサラケを自家用に掘った。あくまで自家用であり、売買の経験はない。出来島では、海から砂利を採って売った人はいた。――「(サラケについて聞いたことが) あるよオラだぢもサルケだば掘ったごとあるよ。売りに行ったんだぁわがねウヂでだば自分の家で焚ぐに。」「それはムガシみな使ってあったばって……。(奥にいる舅に)『サルケ売りにいったってわがねべ。サルケ。サラケ。』」「ま、それでも (サラケを売ったということは知らないが) ジャリとが海がら採ってうにいった人ナンボもあるはんでの。うん。海がらジャリほれ。」

採取の目的 ▼自家用の燃料として採取した。――「オエでだば売ねジブで使うに。××(個人名、U氏) おべでんでねがな。トシいちゃ人だはんでオラなもわがねきゃ自分のつかるにとたばりで」

採取の主体・採取法・乾燥・運搬・保管 ▼W氏の父親が「ナタを大きくしたような道具」で切り上げたものを干した。W氏は運ぶ作業を手伝った。乾燥させたのち、家に持って来た。――「こうな、切りこんで上さあげで干してな。ワも配ったごどあるね。」「たげおっきい、ナンダのおっきいやづだべな。たげこうおっきいんたやづんで、お父さん (父親) がこう切って、それごそこう上げで、そって。」「したばてあれこう切って、ヌマがら上さあげで、干してエさ持って来て。」

用途 ▼囲炉でサルケを使用した。その後、石炭、石油へと移行した。炊事についてはサラケを用いたかどうかは分からない。炊飯はガス、電気へと移行した。設備と道具の変遷が激しく、記憶はあいまいである。――「(ロブヂでサルケを使っていたが、炊飯に使用したかは分からない。) まもなぐガスガマなったねな。それがら電気釜なって。(ガスガマの) その前なんだがわげ分がねぐなった (笑)。最初何の火焚いでやったがら、それはセギユストーブ…でぎできてそれでナンダカンダやたりもしたんだねな。まあ便利になったはんで。石炭で暖とったんだの。それがらセギユなって、段々便利なったな。」

副産物 ▼サラケから出る煙の印象はW氏の心に深く刻み込まれている。――「そうそうサラケってした。(感慨深げに) 煙出でな!」(2017年6月18日取材)

㉔ X氏 昭和4年生(89歳) 女性

来歴 ▼丸山 (商店経営) で生まれ、17歳のとき、すなわち昭和21年に出来島へ嫁いだ。

呼称 ▼サラケと称した。

使用年代 ▼丸山で育ったころ、つまり昭和20年ころまでは、周囲でサラケを使っていた家が多かった。――「(丸山でサラケを焚いていた家は) けっこうあった。全部クズヤネで、うん。こご (出来島) もクズヤネ。こごはこのままだんたの。(まわりではずいぶん) 焚いであった焚いであった。」

入手法 ▼丸山ではヌマから自家用に採取した。売買については知らない。――「ヌマが、私隣村 (丸山) がら来て、隣村だらヌマがら採ったんだけども、こごが (燃料にしたのは) 浜の木 (流木) でねがな。××さん (個人名、㉑のU氏) さ行って聞でみだら。」「売るには分がらない。」

採取の目的 ▼言及なし

採取の時期・場所・主体 ▼溜池や沼、カヤヤヂ (茅の生えた湿地)、田などから採取した。お盆をまたぐ形で夏に採取した。――「タメイゲもあるし、ヌマもあるんだ。それがら、田んぼの、田んぼがらも採ったみたいだね。」「何て言う、そらしてそら。の。ヤヂみたいな。ヤヂがら採るんだでばな。なんてすんだ。出でこない。湿原。ヤヂ。ヤヂがら採るの。カヤヤヂがら。今はみな区画整備して、あの、田にしてしまったけど、もどはホラ、カヤヤヂってあってあたきゃ。そごから採ったわけ。」「やっぱり、今あだり、でねぐナヅ。ナヅ。お盆かげでの。切って、そして干して、で、ウチさ持って来るの。」

乾燥・運搬・保管 ▼乾燥させてから家へ運搬した。

用途 ▼炊事には使用しなかったので、冬季の暖房が主な用途だった。生まれ育った丸山では、ロバタで木とサラケを燃やしている家が多かった。いっぽう、自宅にはすでに小さなストーブがあったので、囲炉ではなくストーブでサラケを使用した。出来島に嫁いだ昭和21年当時、嫁ぎ先の家ではストーブを使用しており、燃料にサラケを使用していなかった。出来島は海が近いので、流木を利用していたのではないかという。――「まずの。あのナヅは焚がねけども冬。それはそのづぎ (夏) は使ねんたの。木だげだんた。うん。あの冬、寒いときにそのサルケ使うんだ。うん。

（ご飯には）つかないみたいな気がする。うん。」「（出来島の嫁ぎ先では）使わね。こごでストーブであったがら。ウヂ（丸山の生家）でも、店であって、もうその時オラもちせどぎストーブであって、となりのウヂ、オンチャマだけどもそごはロバダで、木焚いでサルケやって。うん。」「（丸山ではサラケを焚いていた家が）けっこうあった。全部クズヤネで、うん。こごもクズヤネ。こごはこのままだんたの。（回りではずいぶん）焚いであった焚いであった。ナンだがこご（出来島）は、海ばだがら採ったらしいよ。うん。それだばわがんねえな。××（個人名、㉑のＵ氏）でねば。」「（丸山の生家では使って）ながったの。ストブやって。ストブのながさは入れだんたみたいな気がするね。焚いだんた気がする。はきり覚えでないけども。多分、使ったでしょう。うん。」

操作　▼木の上にサラケを小切りにしたものをハの字に立てて火をつけた。はじめ煙が出るが、しばらくすると炭火のような熾になった。――「各家庭であの、木やって燃やして、これ（くらい）に切って立てて、へば煙でて燃えればなんてだ、炭になって、暖かい。」「木こやってへて燃えてるでしょ。こう四角に切ってこう立でで、（２つをより掛ける）」

副産物　▼煙が目に染みた。丸山や出来島の集落に入ると、町から来た人たちは「サラケくさい」と言ったという話を聞いたことがある。――「目さ。うん。なんがこごの、丸山もほんだけど、この村さ入れば何か、あの、マヅがら来れば『サラケくさい』って言ってだ話聞いだんたの。うん。カマリ。」（2017年6月18日取材）

(4)つがる市木造大畑

㉕ Y氏 昭和5年生(88歳）女性
㉖ Z氏 昭和12年生(81歳）女性

来歴　▼Ｙ氏は昭和５年に当地で生まれ、当地で育った。Ｚ氏は昭和12年に館岡で生まれ、当地へ嫁いだ。

呼称　▼Ｙ氏Ｚ氏ともにサラケと称する。

使用年代　▼Ｙ氏は、小学校のころから大人になるまで、つまり昭和10年代からサラケについての記憶がある。かなり歳をとってからも（少なくとも昭和20年代にも）焚いていたという。――Ｙ氏「オラ子どもの頃だどごで……小学校ごろだでばの。寝でもマナゴいでふて。小学校って、中学校までも、オラだっきゃもっとトシいってがらも焚いだでばの。」

定義・分布・質　▼館岡出身のＺ氏は、嫁いでからその存在を知った。Ｙ氏は、館岡は「山どご」なので、木に恵まれているが、いっぽう自分の生まれ育った大畑では、サラケやカポシを焚いたという。――Ｚ氏「オラだぢの田だばホントにのがったず。嫁なってきてそのサラケだが何だがらってそれとただてやぁ（笑）」Ｙ氏「サラケとただ、オメ山ドゴがら来た人だもな。（私は）こごにいだふとだどごで」Ｚ氏「ワっきゃ分がらねえもの、ワだばな。分がらねえわげ。」Ｙ氏「山どごの人だば山がら何でもホラ。木あるはんでいばて、こごいらへんだばそのサラケとか、カポシ焚いだもんだ。うん。」

入手法　▼田から自家用に採取した。

採取の目的　▼「燃料もなんもねえどごで」、つまり燃料がないのでサラケを利用したとＹ氏は語る。――「なもこごいら辺でなもねぇもんだもの。こごいら辺だっきゃなも、今ごそな。セギユとがストブだはんでなも山さ行がねくてもいいばって、あの、ムガシだっきゃ杉っ葉ふらうに行ったりな。」「燃料もなんもねえどごで。」

採取の時期・場所・主体　▼Ｙ氏によると、春先に田植え前のアラダから、毎年サラケを切った。切ったあとで、稲を植えた。ひとつの田のなかで、その年ごとにサラケを切る範囲を定め、次の年は別の区画から採取した。田が多少低くなるので、土や砂を入れて客土した。サラケを採取するのは一家総出だった。サラケを切るのは祖父で、子どもだったＹ氏と祖母が運搬を手伝った。当時は面倒に思いながら手伝ったので、逆によく覚えているという。Ｚ氏は館岡出身で「山どご」なのでサラケを採取したことはなかった。――Ｙ氏「何月だべ。あれ、田さ水へる前に切たでねえべが。春先だでばの。（田植えより）前。それがら今度、耕してしさ。」Ｙ氏「うん、（サラケを切ったあとに稲を）植えるんず。チヂとが砂とが入れで。どんとこう、ふつの田んぼこごだってへば、すこし低ぐなでばの。サラケ切った分の。おいでだぁむった切ったはんで、毎年切ったはんで」Ｚ氏「ふとづ田がら切るもんでねえべ」Ｙ氏「ふとつ田、同じどごでねぐ同じふとづ田でもしつぁ、よへでしつぁ、あの今年こごまで切れぁ来年こごってして。そいだばちょっと分がってらだ。たて、な。ワもわげとぎだどごでやりてぁぐねぇづてづだいに行ぐもんだどごで（笑）。」Ｙ氏「ムガシ使ったよ。オラダヂムガシやたもんだもな。うん。オエのアラダ（荒田：前の年のままになっている田。田起こしする前の状態）がらサラケ切たもんだ。して、オアだきゃサラケこんだオンジサマ切ればしたぁ、それこう、つらがすにあのこう、まいで（マグ：積み重ねる）乾がしねぁんだでばの。あえツヂがら掘るもんだんだ。そひ乾がすだいな。それ焚いだよ。」Ｚ氏「ワきゃ山ドゴだどごで、そのサラケだがだて、なもワ、焚がねわげ。」Ｙ氏「うん、手伝ったよ。切るのは、あの、あのら、オラの親ほら。切って、ひゃこんだオラ子どものどぎだばバサマどワイ

どこんだそれごとばこんだ運んで」Ｙ氏「山のほだばほだべおん。こごいら辺だばしつぁ、サラケ切ったもんだね。オラきゃ切に行ったもの。切に、てづだいに行った。（女性も子どもも）みんな。」Ｙ氏「ウダどごでねでばの（労働歌などを歌っているような状況ではない）。もでものこんだ、あのもでもの切てこひぇ上げでのぁ。たいした疲れるシゴドだごどでなも歌だのだば歌だのわがんね。」

採取法　▼田の表土を取り除いて、低くなった場所には客土した。「なんとかガマ」という厚い刃の鎌を用いた。その鎌は馬も食べないような柴やカポシ（馬のシクサを刈ったあとに残る先駆樹木の若木の類）を刈り取るのにも用いた。縦横15㎝以上、厚さ10㎝弱の長方形に切った。――Ｙ氏「田んぼにそれ、まずこぢの、田、この、ツ、なんてひゃいい、ツヅ取りければしの、どごだかんだにねぇだいの。それあるどごべづだんず。」Ｙ氏「まんだ、ひぐいばひぐいなりにして、まんだやこう、稲植えで。砂でも何でも、うん、入れだりして。チヂまんだ足して。そして、の。まんだ稲植えでホラ。」Ｚ氏「アレあるどごでぬがったもんだしなぁ。」Ｙ氏「うん、のがったって。」Ｙ氏「それなんだが、オラだぢだばオナゴのふとだばつかねばて、おのジサマどだば、『何だがガマ』だってえ、ふちのカマはそうあづぐねべえ、してあづーぐ作ったそのカマでこして刈ってやったもんだ、『何だガマ』ってあってあったよ。このあだりで。カマ普通のカマだあこう薄っきゃ。でほんでねの。こう厚ーぐでぎでるカマで、その柴とがホラ。そのあの、それごそかでえもの。馬食べねんたもの刈って、あの、燃料にしたでばの。うん、カポシて、つらがてうだでもんであったぁ！」Ｙ氏「でずっとこう、四角っこにこう切るもんだんだ。こう四角こに切って、このぐれあづぐやってこのぐれの大きさ（厚さ10㎝弱、縦横15㎝以上）にして。」

大畑の水虎大明神祠

乾燥・運搬・保管　▼祖父が切ったサラケを運ぶのはＹ氏と祖母だった。あぜに並べて、交互に間を開けて風通りをよくして積み重ねた。乾燥させた後、家に持ってきて、小さく切って使った。――Ｙ氏「サラケきに行ってらあ、オエのジサマサラケ切ってオラこんだそれこんだたないでしてあ、乾がしたでばのお！（田の畦など）そういうどごさ乾がしておいで。乾がへばこんだエさ持って来て」Ｙ氏「それ（田から採取したサラケを）ずっとこう乾がして、それ乾げば今度あの、焚ぐだでばの。エさ持ってきて。Ｙ氏「うん、手伝ったよ。切るのは、あの、あのら、オラの親ほら。切って、ひゃこんだオラ子どものどぎだばバサマどワイどこんだそれごとばこんだ運んで」Ｙ氏「して、オアだきゃサラケこんだオンジサマ切ればしたぁ、それこう、つらがすにあのこう、まいで乾がしねぁんだでばの。あえツヂがら掘るもんだんだ。そひ乾がすだいな。それ焚いだよ。」「してこれ（約15㎝×15㎝×10㎝切ったサラケを）チャックど並べでこんだこう、交互にこんだこう、って（風が）入るようにした、そしてやったもんだ。」

用途　▼Ｙ氏はシボドでサラケを焚いた。炊事の燃料にはカポシ（たとえば、笹の葉を乾燥させて束にしたものや先駆樹木の細い幹の類）やワラを用い、サラケを使ったことはなかった。祖父が山から杉の葉を、祖母は実家のある菰槌（こもつち）に貰いに行っていたようだ。その後ガス、電気へと移行した。暖房については、マキストーブではなく石炭ストーブを利用し、その後石油ストーブになった。Ｚ氏の住む館岡は比較的燃料の入手が易しかったが、「下通り」と呼ばれる地域は、山から離れていて燃料の入手が難しいため、家の軒下に積んだ薪の蓄え具合によって、「木まいでらエだばもうげでらだ」（薪を積んでいる家は裕福だ）、「そごのエのアレわがるだ」（その家の経済状況が分かるんだ）と考えられていたとＺ氏は語る。――Ｙ氏「うんうん、シボドで。」Ｚ氏「今そのシボドねえわげだの。」Ｙ氏「だもそたシボドあるエさはてるふとねいな。（笑）」Ｚ氏「なーんぼな（笑）」Ｙ氏「焚がない。マギストーブ……（ではなく）、セキタ。それがら石炭なったんず。今だあこだセギユだどごでしてな。なもシボドある人ねねな。」Ｙ氏「ご飯だばそんでねえな。ご飯ムガシ、あの、あいだ、ワラで焚いだふともいぺあたいな。オラ、カポシだてしつぁ、あのな、カポシてあの、笹だのいっぺえあづべで、そしぇたばねで乾がしたやづな。馬だの食べねんた、笹のアエだのな。そたやづ、柴だのホラ。それこんだ乾がひぇ、そひぇおっきいマルグにしてカポシでもご飯炊いだし、ワラでも焚いだしな。それがらこんだガシほら。出できてがらガシ利用して。今だあみな電気での。アレして。昔のごたしゃべよホントによぐな、暮らしたもんだど思でばの。」Ｙ氏「んーだ。サルケでご飯だば炊いだごどぁねず。それさあったまるにホラ。暖炉とかあでばの。」Ｙ氏「オァ（私は）使ったね焚いだねオエのジサマだのしつぁ、山さしたカポシ貰いにいたでばの。オェのうろぁ、孫バサマこもづち（菰槌）がぁ来たフトだどごで、こもづちさもらに（貰いに）行ったんたね（ようだ）。オラ子どものとぎな。貰うに。なもこごいら辺でなもねぇもんだもの。こごいら辺だっきゃなも、今ごそな。セギユとがストブだはんでなも山さ行がねくてもいいばって、あの、ムガシだっきゃ杉っ葉ふらうに行ったりな。カポシ……。」Ｚ氏「山ドゴにいれば、こご下通りだてすでばの。へば下通りであの、エの下さあのらぁ、マギまいでれば（積み重ねていれば）、そごねエで（そこの家で）オガネあるだてな！（アハハ